

「龍頭が滝案内」 第3回

「龍頭が滝は黄泉の国の入り口かも?!」

今回は『雲陽誌』から滝神社の紹介です。

○雲陽誌

瀧明神 祭礼十月八日神楽湯立あり

《説明》

龍頭が滝には神社があり江戸時代には「瀧明神」と呼ばれていたようです。

ほかの資料によれば、滝神社の祭神は、伊邪那岐命（伊弉諾尊とも記載されます。読みはイザナギノミコト）、事解男命（コトサカノオノミコト）、速玉雄命（ハヤタマオノミコト）の三神。鎮座されていた場所は滝の洞窟だと思われます。さてこの三柱の神様、日本書紀ではこんな場面に登場します。

伊弉諾尊と伊弉冉尊（イザナミノミコト）とは夫婦、ともに日本の国土を作った神様です。女神である伊弉冉尊は火の神である火神軻遇突智（ヒノカミカグツチ）を産むのですが、火傷をして亡くなりました。そこで伊弉諾尊は伊弉冉尊を追って死者が住む黄泉の国に向かいます。

黄泉の国にいた伊弉冉尊は「私を見ないで」といいます。しかし伊弉諾尊は変わり果てた伊弉冉尊の姿を見てしまいます。逃げ帰ろうとするそのとき、伊弉諾尊は「あなたとは離婚しよう」、そして死者の国の神となった伊弉冉尊が「一日千人を絞殺する」といったのに対し、「それならば私は一日千五百人を生まれよう」と告げます。

古代では約束を固めるのに唾を使う風習があったようですが、先ほどの誓約のために唾を吐き掛けたときに出現した神が「速玉雄命」。次に、こうして二柱の神様が関係を断つときに出現した神が「事解男命」です。「コトサカ」とは関係を断つという意味。日本書紀には泉津事解之男（「泉津」はヨモツと読み、黄泉の国のことです）と出てきますので、黄泉の国と関係を断つ神様ということになります。この滝神社に祀られていた三柱の神様は、黄泉の国にいる伊弉冉尊と決別したときに居合わせていたのです。

するとこんな想像が湧いてきませんか。古代人か中世人かわかりませんが、この三神を滝の洞窟にお祀りしたのは、この洞窟の奥に黄泉の国、死者の国があると信じていたからではないか、と。

滝神社は明治40年10月30日に松笠天満宮に合祀され洞窟にはありません。



この洞窟の向こうに
黄泉の国がある？！